豊庄だより

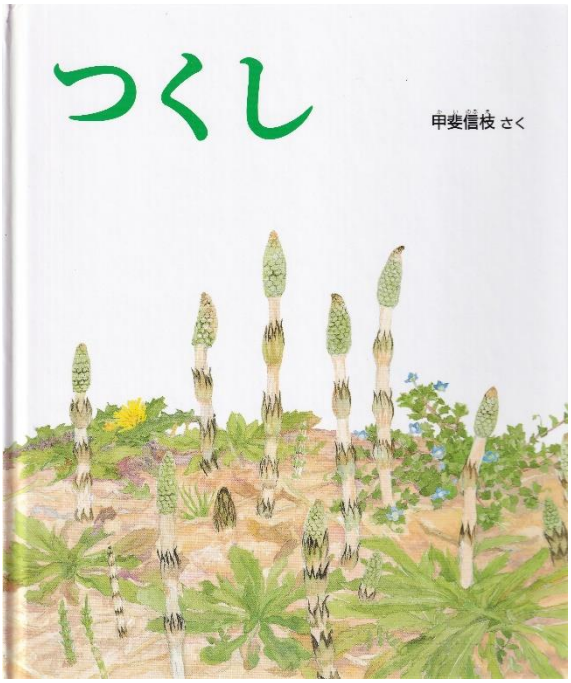
第 702 号 2022 年 3 月 28 日

福岡市早良区南庄２－２６－１３
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長　西尾　達

春休みの頃、ため池やだんだん畑の土手には、つくしがたくさん生えていて、袋いっぱい採って家に持ち帰っていたのは、私が小学生のころでした。田舎で幼少期を過ごしたため、つくしはとても身近なものでした。家に帰り、袴(はかま)を取って、母につくしの卵とじをよく作ってもらいました。学生時代からは都会での生活が続き、その後、福岡市で就職してからも、年に１回食べるか食べないかぐらい。つくしの存在は遠くなっていました。そんなつくしを久しぶりに食べました。もちろん卵とじで。食べながら、次の合同朝の会で話そうと決めました。

話すと決めたら、準備が必要です。つくし本体と根っこでつながっているすぎなを準備しました。以前読んだ甲斐信枝さんの絵本『つくし』（福音館書店）を思い出したのです。この絵本には、地上のつくしの様子だけでなく、土の中のつくしの根っこも描かれています。そして、すぎなと一本の根っこで、つながっていることが分かります。※保育園の図書室においてますので、ぜひお読みください。貸し出しカードを見ると、これまでに、一人しか借りていませんでした。ページをめくって、甲斐信枝さんの絵と文を味わってほしいと思います。

合同朝の会（3 月 22 日）の様子を紹介します（園庭がぬかるんでいたため、ゆりの部屋で、すみれ、ばら、ゆり、ひまわり組だけの会でした)。まず、絵本の表紙を見せました。「つくし」と読んでくれました。そこで、「つくし、食べたことある人、いますか？」と聞いてみました。２～３人、手をあげました。この時、「意外と多いなあ」と思いました。そして、準備したつくしとすぎなを取り出し、見せました。子どもたちの反応は、小さかったためか、よく見えなかったようで、今一つだったみたいでした（※終わった後、図書室前にペットボトルに入れて、展示したのですが、すぐにしぼんでしまいました。やはり、野生のものは、人間の手にかかると、長持ちしません)。そこで終わる予定だったのですが、「つくしのぼうや」（作曲・作詞者不詳）の歌を、ゆり組さんがよく歌っていると聞いていたので、岸本先生のピアノ伴奏で歌いました。とてもいい歌でした。



春になると温かくなり、地中からいろいろな植物が芽を出してきます。生命の息吹が感じ取れます。一方、ヨーロッパのウクライナでは肥沃な大地を戦車が走り、多くの民衆の日常が失われています。野原で春の日差しを浴びてつくしを取る・・・。私たちの周りにある平和な日常、あって当たり前の自由な生活。ウクライナからの映像を見るたびに、気が滅入ってしまう毎日です。